

# 春風秋霜 3月号

令和3年3月1日  
島田市教育委員会だより  
教育長 濱田和彦

春風をもって人に接し、秋霜をもって自らを慎む 佐藤一斎

## 1 社会教育講座「地域と関係人口を考える」集いに参加して

2月7日（日）に笹間交流センターで行われた社会教育講座に参加しました。法政大学大学院石山恒貴教授（リモート参加）、静岡大学教職大学院武井敦史教授、笹間交流センター前館長北島亨さんからの提案の後、3人のパネルディスカッションが行われました。

その中から学校でも参考になると思われたことを紹介します。

- ① 様々な考えを持った人がゆるくつながり、自由に議論し活動できる場（職場や家庭以外のサードプレイス）が必要
- ② 目的の共有や組織作りを優先するより、少人数でもやれることから始めることが大切
- ③ 成功事例は学んでも真似ない
- ④ これからの社会では、関連づけの力、質問力、観察力、ネットワーク力、実験力（新しいアイデアを試す力）が求められる
- ⑤ コロナ禍こそ人とのふれあいや体験が大切

組織を動かそうと考えたとき、目的や目標を明確にし、体制を作ってから動くことが一般的です。しかし、考えをまとめるには時間がかかる場合があります。そんなときは、動ける人が動き始めることで、動きが大きくなる場合があります。良いことなら試してみるという意識です。また、そんなことができる組織は、やらされ感がなく、楽しい職場だと思います。

変化の激しい社会を生きる子供たちにとって、④のような力が求められます。主体的で対話的な深い学びと重なることがたくさんあります。更に、県教委の令和3年度の基本方針の中にもあるように、リアルな体験はICTの活用と共に求められると思います。

## 2 校長面談を終えて

2月18日（木）と19日（金）に校長面談を行い、本年度の取り組みについて説明を受けました。どの学校も新型コロナウイルス感染防止に苦労する中で、教育課程を確実に進めただけでなく、働き方改革にも成果を上げていることにありがたく思いました。

数値目標を基に説明を受ける中で、数値の見方は難しいと思いました。ある項目におけるアンケート結果が100%だとしても、校長の肌感覚として楽観できないと言う校長がいたからです。子供から100%の評価を得ることは大変難しいことですが、数値と共に自分の目を見たものも大切にす校長の姿勢は素晴らしいと思います。

一方で、数値目標が予想より低かった理由をコロナウイルスの影響とした校長もいました。コロナウイルスによる教育への影響は大変大きかったことは事実ですが、目標設定が高ければ評価は厳しいものになります。教師が常により高いものを目指すように関われば、力についても評価は厳しいものになるでしょう。

一般的に力量のある方は自己評価が厳しいと言われています。説明責任を果たすためには、数値で評価することは必要ですが、数値だけに満足することなく、数値に表れないものも分析してみる姿勢が必要だと思います。

### 3 サタデーオープンスクールに参加して

2月20日(土)に伊久美二俣地区で行われたサタデーオープンスクールの炭焼き体験を教育委員と見学しました。子供たちは、木材を決められた長さのにこぎりでカットしたり、薪割機で直径20cm以上もある丸太を割ったりしました。地域の方から炭焼き窯の仕組みも説明を受け、中の様子も見学しました。

のこぎりの使い方に苦労していた子供たちも、回数を重ねる中で上手にひけるようになりました。また、不安そうに薪割機を操作していた子供も、繰り返す中で笑顔が見られるようになりました。

子供たちの様子を見ていて、体験することの大切さを実感しました。デジタル化がどんなに進んでも体験することは大切にすべきです。紅梅が咲く中、温かな日差しを体感するだけでなく、多くのサポーターの支援を受けて炭焼きという貴重な体験ができた子供たちは、多くのことを学び、体感したと思います。

3月6日(土)にできあがった炭を窯出しします。子供たちがどんな表情をするか楽しみです。



炭焼き窯に木材を詰める子供たち

## 肘かけ椅子

磯貝 隆啓 教育委員

### 「50年前の友人」

新年早々うれしい出来事がありました。なんと50年前に苦楽を共にした友人と連絡がついたのです。まるでタイムカプセルです。昭和45年春の東京、私は高校を卒業後、新聞店に住み込みで働く受験生でした。彼も似たような境遇で北海道の札幌南高校の出身です。朝3時に起きて朝刊を配り午後3時ころから夕刊の配達です。200軒ほど担当し集金と新規の勧誘もあり、未集金があると給料から引かれました。給料は確か2万3千円、私は3千円くらいで暮らし、残りは大学の学費積み立てと家の借金に充てていました。

彼は早稲田、私は教育大が目標でライバルでした。互いに社会の情勢や不平等に強い関心を持っていました。1年後、彼は希望の大学に合格、私は不合格でした。それきり音信不通になってしまったのですが、かつての新聞店主と年賀を交換した際、偶然に居所が分かったのです。早速、懐かしさを込めた便りを出しました。そして、彼からも返信が来ましたが、感激が伝わる文面でした。

彼は大学入学後、昼間は学校、夜は印刷会社などで働きやっとな卒業したそうです。在学中より福祉関係の仕事を志して神戸市役所に就職、福祉関係部署を歴任して大学の講師もされたということでした。あの阪神大震災も経験したそうです。私も26年前、災害ボランティアで2度、現地に行っています。丸焼けになった長田市場でも活動しましたが、なんと当時、彼は長田区を担当する社会福祉課の係長だったそうです。あの時、神戸市内のどこかですれ違っていたかもしれません。そうだったのかとしばし思いにふけりました。あの時、市内の高校の体育館には遺体が毛布にくるまれて何百も並んでいたことも思い出します。異様な光景でした。コロナが収まったら神戸に行き、酒を酌み交わしたいと思っています。Sさん、お元気でお過ごしください。